

■ 研究集会「ライナー・シュールマンの哲学——ハイデガーとアナーキーの原理を中心に」

主催 Meiji Institute of Philosophies (MIPs) 2024年4月2日14:00-18:00 明治大学和泉キャンパス リエゾン棟L1教室

ライナー・シュールマンを導入する——その思想の全体像

宮崎裕助 (専修大学)
miyazaki@isc.senshu-u.ac.jp

なぜシュールマンに注目するようになったのか

- ・フランソワ・ヴァール「哲学的秩序」シリーズ
- ・ポストデリダ派の問題——戦後アメリカで活躍したヨーロッパ出身の哲学者たち
- ・デリダの「嘘の歴史」——ライナー・シュールマンのメモリアル講演のひとつ (1996年)
- ・ヴェルナー・ハーマツハーのベンヤミン論「アフォーマティヴ、ストライキ」 (1989年)
- ・ロドルフ・ガシェの書評「薔薇のように——何故なしに」 (1989年)、「ヘゲモニー的幻想」 (2005年)

ライナー・ミヒャエル・マリア・シュールマン 年表

- 1941年2月4日 ドイツ人の両親のもとアムステルダムで生まれる。
- 1960年 (19歳) ドイツ、クレーフェルトのギムナジウムでアビトゥア (高校卒業資格) 取得。
- 1962–1969年 (21–28歳) [イスラエルのキブツでの共同生活とその挫折を経て] フランス、エソンヌのドミニコ会神学校ル・ソルショワールの神学部および哲学部で学ぶ。ドイツのミュンヘン大学とフライブルク大学で大学院に断続的に在籍。
- 1969年 (28歳) ル・ソルショワールで修士号を取得、読師 (聖職位の下から2番目の聖職者) となる。
- 1970年 (29歳) 司祭に叙階される。
- 1971年 (30歳) パリ政治学院修了、パリのソルボンヌ大学で哲学第3課程博士号を取得。
- 1972年 (31歳) 第一作 *Maître Eckhart ou la joie errante* [マイスター・エックハルト、あるいは彷徨える歓喜] 出版。
- 1971–1972年 (30–31歳) アメリカのカトリック大学 [ワシントンD.C.] で哲学を教える。
- 1972–1975年 (31–34歳) デュケイン大学 [ペンシルベニア州ピッツバーグ] で哲学を教える。
- 1975年 (34歳) 聖職を辞し、ニュー・スクール・フォー・ソーシャル・リサーチで教え始める。1993年の死去まで教えることになる。
- 1976年 (35歳) 小説 *Les Origines* を出版。アカデミー・フランセーズよりブロケット＝ゴナン賞を受賞。
- 1980年 (39歳) ニュー・スクール・フォー・ソーシャル・リサーチの終身在職資格を得る。
- 1981年 (40歳) パリのソルボンヌ大学から文学と人間科学の博士号を授与される。[国家博士論文タイトル「政治と脱構築——ハイデガーと実践哲学の諸基礎」]
- 1982年 (41歳) *Le Principe d'anarchie: Heidegger et la question de l'agir* [アナーキーの原理——ハイデガーと行為の問い] 出版。
- 1987年 (46歳) アメリカに帰化。
- 1988年 (47歳) *Le Principe d'anarchie* の英訳版 (シュールマン自身が翻訳に関与して改訂が施されている) *Heidegger on Being and Acting* が『チョイス』誌の1987–88年度の優秀学術書に選出。
- 1992年 (51歳) 現象学・実存哲学協会の「スカラーズ・セッション」を受賞。
- 1993年8月20日 (52歳) ニューヨークでエイズにより死去。

(Pierre Adler 作成。〔 〕は宮崎による補足)

出典：Graduate Faculty Philosophy Journal, Vol.19, No.2–Vol.20, No. 1. 1997.

- 1972 *Maître Eckhart et la joie errante* [マイスター・エックハルト、あるいは彷徨える歓喜] (Denoël刊、のち、2005、Rivagesより再刊) 1971年にソルボンヌに提出した博士論文にもとづく。マイスター・エックハルトの仏訳と長文の分析註釈
- 1977 *Les Origines* (Fayard刊) シュールマンの自伝的な要素をふくむ小説。ドイツ人としてナチスに協力した父をもつ負い目。
- 1982 *Le Principe d'anarchie: Heidegger et la question de l'agir* (Seuil刊、フランソワ・ヴァール監修の「哲学的秩序」叢書の一冊として刊行)。シュールマンの主著となるハイデガー論。後述。
- 1989 *The Public Realm*. Edited by Reiner Schürmann (State University of New York Press) . 1967–1975年のニュースクールでのアレント記念シンポジウムの連続講演を集めたもの。マンフレート・リーデル、ルートヴィヒ・ジープ、アーベル、ヨナス、リオタール、ヴァルデンフェルス、ミシェル・アンリ、アグネス・ヘラー、ラインハルト・コゼレック等、錚々たる面子。シュールマンは冒頭の序論でカントの判断力論を寄稿している。
- (以下遺稿出版)
- 1996 *Des Hégémonies brisées*, posthumous publication (T.E.R.) シュールマンの遺稿となった第二の哲学的名著にして大著。ジェラルド・グラネルが設立した出版社 Trans-Europ-Repressより刊行。古代ギリシア以来の「ヘゲモニー幻想」の展開と崩壊を詳細に分析。パルメニデス、プロティノス、キケロ、アウグスティヌス、エックハルト、カントとルターから、ハイデガー『哲学への寄与』の読解からなる。『アナーキーの原理』のプロジェクトをさらに拡大して展開したもの。シュールマンの哲学史的達成。
- 2008 *On Heidegger's Being and Time*, by Simon Critchley and Reiner Schürmann. Edited by Steven Levine (Routledge) [サイモン・クリッチリー、ライナー・シュールマン共著『ハイデガー『存在と時間』を読む』ステイヴン・レヴィン編、串田純一訳、法政大学出版局 2017年] シュールマンのハイデガー講義（ニュースクール、1978、82、86年）の講義草稿から構成したもの。いまのところ唯一の訳書。
- ・他に、チューリッヒの出版社 Diaphanes より、過去の論文、講義録、遺稿の集成が刊行予定。以下は、2024年3月現在の刊行済みのもの
- 2019 *Tomorrow the Manifold: Essays on Foucault, Anarchy, and the Singularization to Come* (1983–91年のシュールマンのフーコー論集成。フーコーにそくしてアナーキーの主題が展開されている。一部邦訳あり「アナーキーな主体として自己を自律的に形成する(抄)」HAPAX訳、『HAPAX6——破壊』夜光社、2016年)
- 2020 *The Philosophy of Nietzsche* (1975夏、1977秋、1984春、1988春のニーチェ講義) 巻末にシュールマンの講義プログラムリストがあり有益。【資料参照】
- 2020 *Neo-Aristotelianism and the Medieval Renaissance. On Aquinas, Ockham, and Eckhart* (1978春、1991春の講義録。アクィナス、オッカム、エックハルトをもとにしたシュールマンの中世ルネサンス論)
- 2021 *Reading Marx: On Transcendental Materialism* (1977秋の講義録。超越論的唯物論としてのマルクス。シュールマンのプラクシス論を哲学的マルクスの読解として展開)
- 2022 *Modern Philosophies of the Will* アーレントの『精神の生活』に対抗するかたちで展開されたシュールマンの「意志」の哲学の講義原稿。1980秋、1987春、1992春の講義。
- 2024 *Ways of Releasement: Writings on God, Eckhart, and Zen* エックハルト、禅について。シュールマンの初期のエックハルト論にまつわるさまざまな資料を含む。

・その他の日本語既訳【資料参照】

——「自然法則と裸の自然——マイスター・エックハルトにおける思惟の経験について」堀尾孟編『明日への提言——京都禅シンポ論集』天龍寺国際総合研修所、1999年、369–408頁

——「ハイデッガーをいかに読むか（抄）」『創文』256号（1985年）18–20頁

シュールマンのハイデッガー論の問題提起

・ハイデッガーを後ろ向きに読むこと

前期→後期という発展図式、あるいは「転回」によるのではなく、後期→前期の順で読むこと。なぜか？

『存在と時間』が中断して「存在への問い」を現存在分析に多く割いてしまったために、『存在と時間』の第二部の存在論の歴史の解体というプロジェクト（とりわけ冒頭の8節までの問題提起）が追究されないままに終わった。存在の意味としての時間の問題が、現存在の時間性という問題で終わってしまっていることの問題。存在は時間であるというより包括的なテーゼは、後期著作（たとえば『ヒューマニズム書簡』『時間と存在』）から読まないで『存在と時間』の真の射程は見えてこない。

・本来的決意性の意味

前期著作にとどまり、そこから出発するかぎり、ハイデッガーのナチへの政治的関与に収斂するかたちで解釈されてしまう。存在の意味への問いを狭めないためには、そうではなく、離脱、放下、出来事といった後期著作の概念の射程を開くものとして、存在の意味を再解釈しなければならない。

・アルケーなき行為

そもそも政治的行動のような「行為」は理論から導き出せるのか。

存在の哲学から行為の哲学、第一哲学から実践哲学、倫理学を派生させようとすることの誤り。

行為は、アルケー、起源・原理・根拠・規範にそくしてなされるという図式、そうした考え方そのものが形而上学であり、ひとつの閉域をなしている。存在論の歴史の解体（＝脱構築）はそのことを明らかにする。とりもなおさずそれは「アルケーなき行為」という行為本来の射程を明らかにする。つまり、行為とは本質的にアナーキー（没アルケー）である。

・差異としての「現前」

アルケーに準拠することなしに、行為がそのものとして現前すること。形而上学にとらわれたアルケー支配のもとでの同一性の現前ではなく（デリダが現前の形而上学として明るみにした）、行為がそのものとしてなされるような差異としての現前を思考すること。アルケーなき行為の働きを、シュールマンは後期ハイデッガーの用語法にしたがって「現前 (présence)」と呼び直した。「現前化」「現前作用」。英訳では「presencing」と訳している。

ここで問われているのは、ブルードンやバクーニン、そして彼らの弟子たちが用いたような意味での「アナーキー」ではない。彼ら指導者たちが求めたのは、起源をズラすことであり、権威的権力としての princeps [第一者] に代えて、合理的な力としての principium [原理] を置くことにほかならなかった。それは、このうえなく形而上学的な操作であり、ひとつの標的になっているものを別の標的に取り替えたにすぎない。それにたいして、ここで問われることになるアナーキーとは、〈行為〉の根拠を侵蝕した歴史にとっての名である。

(Le principe d'anarchie, p. 16)

・存在のトポロジー

後期ハイデガーは、存在の意味への問いを「存在のトポロジー」として捉えなおし、複数の「現前化」としての行為を思索する試みである。これは、ナチスの「総統原理」（総統を中心として行為を全体化する原理）とはまったく対立する。現存在の実存論的分析論から「存在のトポロジー」を解釈するのではなく、存在のトポロジーそのものを解釈して、実存論的分析論を展開すること。

ハイデガーを始めから終わりにむけて読むとき、つまり実存論的分析論から〈存在のトポロジー〉にむかって読むとき、ともすると「複数性を損なった統一性の理念化」が解釈されてしまう。だが、終わってから始めにむかって〈トポロジー〉から実存論的分析論にむけて読むなら、正反対の事態がおのずと明らかになる。〈現前〉は、形而上学的な諸原理を奪われ、いっそうニーチェ的で「カオス-実践的」となるのである。根拠の統一的な概念に代えて「四方域〔Geviert〕」が生ずる。「堅固な意志」への称讃に代えて、離脱〔détachement：エックハルトに由来する用語〕が、大学を国民奉仕のうちに統合することに代えて、テクノロジーとサイバネティクスへの異議申し立てが、総統と権利のあいだでの純然たる同一化に代えて、アナキーがそれぞれ生ずる。(Ibid., p. 24)

・フーコー読解との関連

後期から前期に遡行的に解釈する読解戦略は、フーコーの権力論に対しても行われる。フーコーの権力論は、近代的な主体の自発的隷属化の様式を分析した（例、パノプティコン・モデルの分析等）。つまり、近代の自律的主体は、啓蒙された自己形成どころか、隷属化の様式と一体であるということを示した。

『知の意志』以降のフーコーは「可能なる自己形成としての主体化」を探究する。いわゆる倫理的主体の回帰として整理される。しかしこれは、主体の内面的自己への回帰を意味しているわけではない。隷属化のロジックを逆にたどることで、別のしかたで自律的なものへと生成する自己の可能性が見えてくる。それを最晩年のフーコーは探究した。

例：古代ギリシアのポリス市民、古代ローマのコスモポリタン、初期キリスト教団における都市の成員、宗教改革におけるプロテスタント共同体、近代の黎明期のデカルト、啓蒙主義のスポークスマンとしてのカント。

時代ごとに主体性の新たな形式が立ち上がってくる局面。私的な自己内省ではなく、公的な闘争としての主体化が問われている。そこに垣間見えるのは「アナキーな主体」としての自己形成の可能性。

フーコーの読解を通じて、現代の主体化の局面はいかに現れているか？を考えさせる。

・カトリーヌ・マラーブの「アナキズム論『泥棒！——アナキズムと哲学』（2023年）での言及
第4章で「存在論的アナキー」の哲学としてシュールマンが整理されている。シュールマン入門になっている。

■ 本日の資料 シュールマン既訳+講義年表

（当日出席者のみへの配布）